

神戸銀行 支店長の 視点

別所昌樹氏



来週から師走です。12月といえは忠臣蔵と思い週末、赤穂に出かけました。坂越の牡蠣を堪能した後、花岳寺、大石神社、赤穂城址と巡り赤穂市立歴史博物館に立ち寄ると、あるものが目を引きました。藩札をめぐる赤穂義士の奮闘についての解説です。

藩札は、江戸時代の藩が発行した紙幣です。取引の決済に必要な通貨の領民等への柔軟な供給などが狙いでした。赤穂藩での発行は1680年。領内では銀貨とほぼ等価で交換される藩札を使わせ、領外から入る正貨（金銀貨）は藩が吸収し交換に備える仕組みでした。藩経由で売る塩の代金が流入正貨の多くを占めた赤穂ではこの仕組みはうまく回ったようですが、ある日突然危機が訪れました。1

赤穂義士と通貨発行者の矜持

701年の殿中刃傷事件です。

第一報が赤穂に届いたのは事件5日後の3月19日。藩の取りつぶしに伴う藩札の銀貨への払い戻しは驚くべき速さで進められました。翌20日には始まり、わずか数日でほぼ完了しました。また赤穂藩には、塩田の運上銀（営業税収入）も合わせて藩札発行高に見合う銀貨がありました。しかし、運上銀は借金の担保となっており迅速な引き換えにあてられなかったため、藩札額面の6割に相当する銀貨だけ払い戻す扱いとされました。ただそれでも、当時としては高い割合だったようです。

時は下り、現金は中央銀行の信用にもとづき発行され、銀行等の預金は払い戻しに備えた所要の資金の備えと金融監督や預金保険に支えられています。このように通貨の信頼を保つ仕組みは変わりましたが、危機に迅速に対応し、日頃から資産の健全性を保つことは、今にもつながる通貨発行者の矜持と感じました。